

「情報生活科」の内容

「情報生活科」の目標は，身近な情報に関する知識の習得や課題解決を通して，情報及び情報技術の進展が人間や社会に及ぼす影響を正しく理解させ，主体的に情報を活用し，発信できる能力と態度を養うことです。

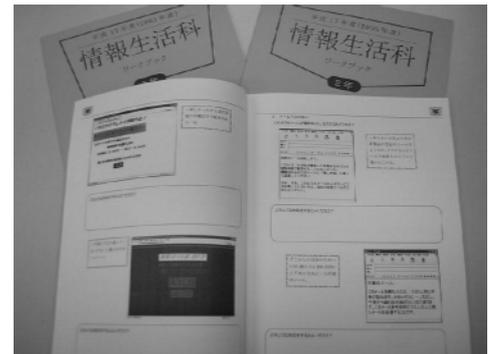
1年生 24 時間，2年生 21 時間，3年生 21 時間を，総合的な学習の時間に配当し，学級担任をふくめたチームティーチングで行います。

何かの作品を製作することを通して体験的に学ぶことができるように，学年別にワークブックを準備しました。

めざす生徒像	1 年生	2 年生	3 年生
具体的な姿	相手の気持ちを考えて，情報を扱ったり，情報技術を使ったりすることができる。	他者への影響をを考えて，情報を扱ったり，情報技術を使ったりすることができる。	社会的な責任を持ち，自分や社会のために，情報を扱ったり，情報技術を使ったりできる。
情報モラル，マナーを身につけた生徒			
育てたい四つの力	1 年生	2 年生	3 年生
情報を読み解く能力	身近な情報に目を向け，その確かさについて考えることができる。	身近な情報に目を向け，その確かさについて客観的・分析的に考えることができる。	身近な情報に批判的な目を向け，その確かさや社会的背景について読み解くことができる。
人とのコミュニケーション能力	自分の立場を理解して，情報伝達方法を活用し，他者と関わることができる。	他者の立場を理解して，情報伝達方法を活用し，自分を生かすことができる。	自分と社会のあり方について考えて，情報伝達方法を活用し，自分を生かすことができる。
情報機器・手段を主体的に使いこなす能力	情報機器・手段の特性を知り，使うことができる。	情報機器・手段の特性を理解し，使い分けることができる。	情報機器・手段の特性を生かし，使いこなすことができる。
情報を効果的に発信する能力	情報を吟味して，正しく発信することができる。	発信する情報の内容をより効果的な方法で発信することができる。	発信する情報の内容を高めながら，誤解のないように発信することができる。

学習内容

1 年生	・情報生活科に入門！・情報のモラルとルール「ネット社会を上手に歩こう」・写真レポート「紹介！附属中の」・上手に情報に会う・プレゼンテーションの方法・発表の方法「意外なわたし紹介」
2 年生	・データを活用しよう「附中の は・・・」・BGMで演出しよう「紹介！附中生の日」
3 年生	・情報のモラルとルール「高度情報通信社会にくらすわたしたち」・私の愛するまちをつくろう」・3年間の学習を Web にまとめよう「自分のあゆみを Web ページで発信しよう」



コンピュータ教育からの脱却

総合学習の危機

「BIWAKO TIME」が大きく転換を迫られることになったのは，ネットワーク回線の普及やインターネット検索エンジンの充実などによって，人を介さない情報の入手が容易になったことがあげられます。

調査・研究成果をコピー＆ペーストで整えることができるようになると，当然のように生徒の関心は，地道な情報収集や発表内容よりも，発表方法に向けられます。

発表会の相互評価では，決まって「発表の声が大きかった／小さかった」，「話の内容が分かりやすかった／分かりにくかった」などと指摘はするものの，内容については質問を返そうとはせずに，BGMをふんだんに用いたビデオレポートやアニメーション効果を多用したスライドショーの内容が明らかに乏しいものであっても評価が高くなりがちでした。

つまり，発表方法には多大な関心を寄せても，発表内容については吟味せず鵜呑みしてしまいやすいといえるのです。

また，「BIWAKO TIME」の学習を一層深めていく過程で，生徒の思考や活動の高まりが不十分であると感じられたことがあります。例えば，新たな問題を発見することや，批判的なものの見方が不十分で，問題解決に向かっているとはいえないものや，他の人の意見を参考にして考えを深めさせることが困難な場面に直面し，指導の工夫が求められるようになってきました。

「情報生活科」の限界

「情報生活科」では作品づくりを通して，学校生活や社会生活での情報機器の効果的利用法を身につけさせる単元展開をとっていたため，情報機器を器用に使いこなす生徒がたくさん育ってはいましたが，反面，生徒に情報の吟味や生産の力はあまりついていなかったと言わざるを得ません。つまり，「情報生活科」は，メディアの使いこなす方や倫理的留意点については学習内容を用意していましたが，それ以外の部分は生徒の気づきに委ねざるを得なかったのです。

学習指導要領が求めるもの

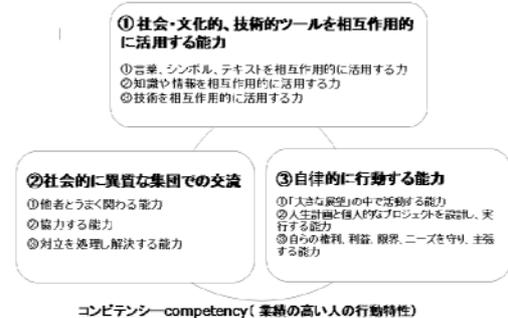
中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」によると、社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項の1つめに情報教育があげられています。その中では、情報活用能力を育むことが、知識・技能を活用して行う言語活動の基盤となるものであると位置づけられています。

国際的学力調査(PISA, TIMSS)の結果が公表され、基礎・基本の習得については一定の成果が見られたものの、活用する力・応用する力については課題があることが明らかになりました。これらの結果は、自発的に学習する意欲や習慣を身につけさせることを軽視する風潮に警鐘を鳴らすものです。PISA 調査の概念の枠組みの基本となっているのは OECD が報告したキー・コンピテンシーであり、この一つめには、「社会・文化的、技術的ツールを相互的に活用する能力」があげられています。この能力とは次の三つをあわせたものであると定義されています。

言葉、シンボル、テキストを相互作用的に活用する能力
知識や情報を相互作用的に活用する能力
技術を相互作用的に活用する能力

これらは情報リテラシーともよばれるものであり、これからの教育ではすべての場面で、目の状況に対して特定の定式や方法を反復継続的に当てはめることができる力だけではなく、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考える力が求められているといえます。

キー・コンピテンシーのカテゴリー



「コンピュータ利用教育」との決別

高等学校の「情報科」は、「コンピュータや情報通信ネットワークなどの活用を通して、情報を適切に収集・処理・発信するための基礎的な知識と技能を習得させるとともに、情報を主体的に活用しようとする態度を育てる」、「コンピュータにおける情報の表し方や処理の仕組み、情報社会を支える情報技術の役割や影響を理解させ、問題解決においてコンピュータを効果的に活用するための科学的な考え方や方法を習得させる」、「情報のデジタル化や情報通信ネットワークの特性を理解させ、表現やコミュニケーションにおいてコンピュータなどを効果的に活用する能力を養うとともに、情報化の進展が社会に及ぼす影響を理解させ、情報社会に参加する上での望ましい態度を育てる」ことを目標としています。

しかし、コンピュータ利用を最終目的とする限り、各教科の基底の知識・技能としてはたらく学習内容とはなり得ません。このことは、高等学校の「情報科」のみならず、プログラミングの基礎を学習する中学校の技術・家庭科やオフィスソフトの使用法を教えるための今般の情報教育にもあてはまることです。

したがって、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考える力を高めさせるためには、「批判的思考力・問題解決能力・問題発見能力を育成し、生徒の感性と論理的に考える力を高める」ことを目標として、新たな情報教育の枠組みを構築する必要があるといえます。

その一方で、情報の学習では、高度情報通信社会への移行に伴って国家・社会の形成者として新たに必要とされる知識・技能と、情報の本質の理解、扱い方の定着を図ることも重要であり、そのための情報モラルの育成は、高等学校の「情報科」、中学校の技術・家庭科との関連に留意することが大切なのは、言うまでもないことです。

情報教育の新たな枠組み

本校では平成 18(2006)年度で「情報生活科」を閉じ、代わって新たに「情報の時間」を開設することで、特に情報を吟味したり生産したりするための基本的な知識や思考法を、中学生に必要な範囲で教科の枠を越えて横断的に学ばせようとするのをねらいました。情報教育の新たな枠組みとして、本校「情報の時間」は、単元によっては必要な知識を先に与え、演習的に作業や体験を行う展開とします。例えば、「調べ学習」が「丸写し学習」にならないための複数情報源の比較検討法や、調査データの読み取り方など、正確な思考を各教科で十分に働かせるため、判断の根拠となる部分を体系づけるために必要な知識・技術を提示します。立派な作品の制作を最終目標とせず、作品づくりを演習として位置づけることで、情報との関わり方について、生徒の気づきに委ねるのではなく、目的意識を持たせながら感得させるようにします。したがって、「情報の時間」は情報機器の構造や操作についての学習も扱いますが、主眼には置いていません。この点において既設の技術・家庭科や高等学校も「情報科」、あるいは本校の「情報生活科」とは目的も内容も異なるものです。

いわゆる「PISA ショック」を背景にして改訂された学習指導要領は、活用する力の育成を強調し、各教科における言語活動の充実を求めています。本校の立場から言えば、全てまさに本研究の対象となるものといえます。なぜなら本研究は、活用する力の内実を明らかにすることとほぼ同じことであって、言語活動の充実が今後生み出すと予想される課題を先取りしてその答えをも求めるからです。